

村と同族組織

四年次生 寺 沢 洋 子

福武直氏は、日本の村落構造を同族結合と講組結合に二分している。同族結合は本家、分家関係に基づく上下的關係であり、東北農村に多い。講組結合は平等關係であり、西南農村に多い。しかし講組結合の中にも貧富の差が有り、同族組織の中にみられるような上下的關係が存在している。従って村落構造を同族結合と講組結合とに区分する事には問題があると思う。

ところで部落構造は時代とともに変化する。その変化の仕方は、同族結合から講組結合へすなわち縦の構造から横の構造へ動くのが常である。

そこで村落構造の変化と部落の移り変りとの關係をとらえ、現在の農村がどのような状態に置かれているかを調べる為に、同族組織に焦点を当てたのである。調査地は青森県三戸郡名川町大字平の中に存在する字田中・田中平・柞木田・荒谷という四つの小字を合わせ、通称田中と呼ばれている部落である。

名川町は青森県の最南端に在り、氣候は冬でも雪が少なく、他の地域より比較的暖かい。農業以外これといった産業もない純粋な農村地帯である。農作物は米と、りんご、梨等の果樹が主体である。五月になると桜の花が開き、それと同時にりんご、梨、桃等の花も一斉に咲き乱れ、とても美しい光景である。

又、都会のように人々のこせこせ行きかう姿もなく、静止した村の中に消毒する際の発動機の音がわずかに活氣を与える位のものである。何もかも世間からうとくなくなってしまいそうな程静かな環境である。

そこでこの静かな村と同族組織の關係について述べる事にする。

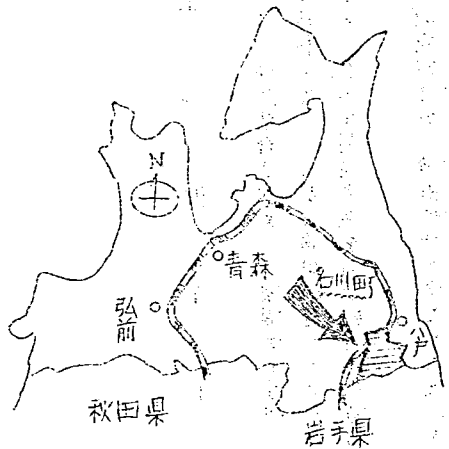
同族組織を定義すれば、家の生活の世代的な連続の間に、家族はいわゆる分家という形で分れてゆき、この分家と同じ部落の中に出された場合、その本家と分家の關係に基づいて構成されるものである。同族組織の構成單位は個人ではなく家である。従つて、そこに住む人々は常に家を背景として行動しなければならない。そしてこの家の存続と共に、同族という關係はと切れる事なく永久に続く。

ここで分家について少し触れておく。分家とは「分居せる家族がやがては公的な家として承認される事である。」当部落では、分家する者は二・三男ないしそれ以下の者の他婚養子や雇人による場合があり、分家は必ずしも血縁の關係で成立したのではない。分家が許されるのは本家に一〇年前後仕えた後であった。分家する際には本家から田地、馬等の付与品が分け与えられた。

しかし分家してもなお農作業、その他の労働の為に本家へ手依いに行った。従つて分家というのは本家からの完全な独立ではなかった。

当部落は全戸約三六戸、五つの同族組織がある。同族組織の規模は大きいもので九戸、小さいものは三戸で構成されている。比較的小規模な同族組織であるが、何百年かの部部落構造の基盤を成し、又部落の人々が生活する為の單位となつて来た。それは様々な慣行を通して最も明確に知る事が出来る。そこで慣行と同族組織の關連について述べる。

圖 1. 名川町位置圖



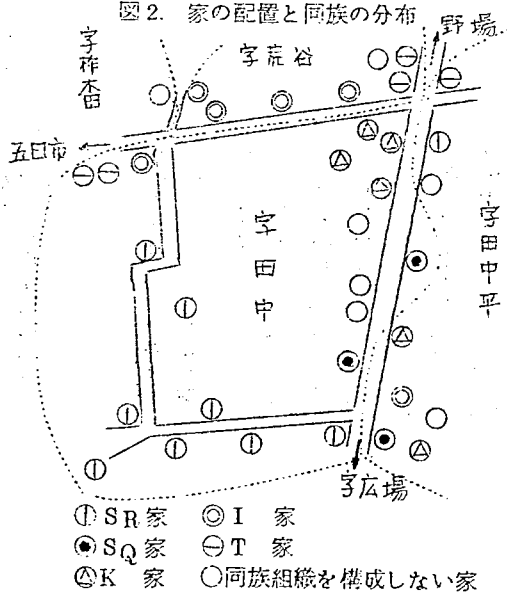
一、田植え：現在も同族の間で行なわれている。田植えの順番は苗の出来具合によって決まる。同族の者には手間賃を払わない。昔は、田植えが行なわれている期間中は分家の家族が本家へ集まり、食べたり、飲んだりしていた。

一、収穫：自分の家だけで収穫しきれない場合は同族の者が手伝う。機械の貸し借りも同族の間で行なわれる。一、農作業がすべて終り、農閑期に入る際に庭じまいが行なわれる。本家が農作業を手伝いに来てくれた分家、その他の農業日雇人を招待して、御馳走する日であった。今はない。昔、手間賃を払う代りに行なったものである。

一、お彼岸：分家が本家へお団子を届けた。それに対する本家のお返しも又、お団子であった。しかし同じ物を交換し合う事もないだろうという事で、本家、分家間の話し合いで廃止になった。お彼岸の際に本家から分家を訪問するのは分家に新しい仏がある場合に限られる。

一、婚姻：式には同族、親類、隣近所の者が招待される。式の座席は必ず本家が上座に座る事になっている。式

図2. 家の配置と同族の分布



の日に使用される食器、座蒲団等はすべて本家で揃えてあり分家に貸し出した。昭和に入ってからには部落で揃えるようになった。

一、葬式：席順は婚姻と同じく、本家が上座に座る。分家は仏に近い方の席から新しい分家、古い分家という順に並ぶ。各仕事の手配は、御馳走作り、花こしらえ、障子貼り換えは分家の者が行う。棺をかつぐ者も分家から五人出る。穴を掘る者は棺をかついだ人が当る。お墓の配置は本家を中心に位置し、それを分家の墓が取り囲んでいる。葬式以降三年間は同族、親類の者がお墓まいりに行く。

婚姻や葬式のしきたりに関しては今も昔も大差なく、殆んど昔のままの形で行なわれている。

以上あげた慣行を通して、当部落に於て同族組織が重要な存在であったという事を知る事が出来る。それと同時にこの慣行を実行する際の中心的な役割を果すものは、絶対的権力を握っていた本家であったという事も理解出来るのである。本家は分家を支配し、部落構造は縁の構造を形造っていた。しかし本家分家という上下関係によつて、本家だけが一方的に利益を得ていたわけではない。ただ、分家が許されたといつても、完全な本家からの独立ではなく、分家後も農業、その他の労働力として本家へただ働きに行っていたという点だけは考えれば本家が一方的に利益を得ていた事になる。しかし分家は本家に仕え、本家から経済的な恩恵を得ていた。ただ働きといつても本家へ働きに行っている間は食事が供給されたり、農作物が分け与えられたりしていた。この当時は同族組織という狭い閉鎖的な社会の中でも土地に結びつき、自分たちの食べる作物を作っていれば生活に困る事はなかった。しかし時代の流れは、このような部落構造を変えて来た。今では本家が権力を握り、分家を統制する縁の構造をもつ同族組織は存在せず、本家・分家が平等の立場に立つ縁の関係としての同族組織へ変化している。表面だけを見ると、もう同族組織は消滅してしまつたかのように思える。日常生活は同族組織とは無関係に営まれているからである。しかし内面から探った場合、同族組織は存在する。本家・分家が平等であるという考えの基礎に本家・分家の存在を認め合う意識が人々の心の中に潜在的なものとして残っている。従つて、今でも、

表 1. 各同族の経営概況 (昭和44年現在)

		自作別	水田	普通畑	果樹地	計	山林	兼業
SR家	① 自	37 ^a	a37 a	74 ^a	- ^a	輸送		
	2 自	11	-	36	47	-	-	
	3 自	10	12	-	22	-	出稼	
	4 自	-	-	-	-	-	公積	
	5 自	11	25	20	56	-	養鶏	
	6 自	23	51	9	83	-	大工	
	7 自	06	-	22	226	-	輸送	
	8 自	36	10	79	125	-	-	
	9 自	73	-	70	143	100	商業	
SQ家	① 小	9	-	-	9	-	公積	
	2 自	81	36	216	333	-	-	
	3					-	商業	
K家	① 自	75	-	128	203	300	-	
	2 自	02	208	47	68	-	公積	
	3 自	-	70	137	207	300	-	
	4 自	14	-	79	93	-	-	
	5 自	12	133	15	159	-	-	
	6 自	12	-	81	93	-	公積	
I家	① 自	-	20	-	20	-	公積	
	2 自	42	160	202	200	-	-	
	3 自	5	131	136	-	-	-	
	4 自	13	-	76	90	-	出稼	
	5 自	-	22	-	22	-	出稼	
	6 自	-	-	-	-	-	公積	
T家	① 自	-	-	-	-	-	病院	
	2 自	4	5	5	14	-	大工	
	3 自				98		商業	
	4 自	-	12	123	145	-	穀採	
	5 自	37	6	39	82	-	-	

※番号の○は本家を表わす。

婚姻、葬式、田植え等の慣行が行なわれる時に同族組織の存在が表面に浮かび上ってくる。すなわち戦前には自覚され、認識された統一体であった同族組織が戦後は自覚されない、認識されない潜在的な統一体となったという事が出来る。

ところでこのように変化した原因は何なのであろうか、この事について次に述べる事にする。

原因は、一般的には農地改革と資本主義経済の浸透による社会階級の拡大による場合が考えられる。しかし当部落の場合には、それ以前、すなわち昭和一〇年代に本家没落という事態が生じている。五つの同族組織のうち四つの同族組織の本家が財産喪失によって没落の過程を辿ったのである。本家の没落、それは分家にとって自分達の生活を左右される程重大な出来事であった。なぜなら、分家は本家から経済的な恩恵を得る事が出来なくなり

本家から自立する事を余儀なくされたからである。しかしこれが原因で同族組織が全然顧みられなくなる事はなかった。長い間、部落の人々は同族組織と表裏一体となりながら生活して来たのである。従って、そこには長い間に培われた経済的な連りを越えた愛情というものが存在している。その愛情というものの作用が、本家が没落してもなお分家を同族組織の中に留める要因になったと考える。以上の事と、戦前に於ては同族組織から離れてしまふと何も頼るものがなかったという理由もあって、同族組織という縦の構造に代って平等の關係が生じるまでには至らなかった。ところが戦後、農地改革や、資本主義経済の浸透によって、残存し続けていた縦の構造の同族組織に変化が生じるようになったのである。

そこでまず初めに農地改革について述べる事にする。

当部落には大地主も、小作人を使う程の土地所有者もいなかった。小作人も二、三戸でいずれも他部落の者から土地を借りていた。従って、部落内部だけでは農地改革による影響は少なかった。ただ村（旧名久井村）全体ではかなり影響を受けているので、その影響が多少当部落まで及んで来たという事が考えられるのである。

次に資本主義経済の浸透について述べる。

同族組織が自覚され、認識された統一体であった時には、同族組織の枠の中で同族の者が互に協力し合い、土地に結びつき、ほぼ自給自足で十分生活が出来た。ところが資本主義経済の浸透はこの閉鎖的な社会を崩壊して来た。現在の部落の人々の生活を見てもわかるであろう。テレビ、冷蔵庫、農業機械等の普及はめざましいものである。人々はお金無くして生活出来なくなっている。だからお金を得る為に同族組織の枠を越えて外部社会へ出て行くのである。

当部落は昭和二三年に農協が設置され、農協に農林生産物を運ぶだけで大部分の収入を得る道が開かれた。それまで生産者自身の食糧を目的としていた農業も販売という目的を持つようになった。販売先も、初めは町内ではほぼ100%消費されていたが、次第に県内（名川町を除く）、県外へ拡大されるようになった。又農協は肥料、農

定着性を持つものも当然である。このような永続性、定着性ないし、その基礎としての土地所有が同族組織を今なお部落の中に存在させる理由になっていると考える。だがこれも時代の流れと共に一層影に隠れた存在となっていく事はないであらう。

表2. 農地改革前後の自・小作比較(旧名久井村)

	農地改革前		改革後(昭24年)		昭和25年	
	戸数	構成比	戸数	構成比	戸数	構成比
自作	457戸	51.8%	632戸	65.8%	661戸	67.5%
自兼小作	235	26.6	201	20.9	205	20.9
小兼自作	78	8.9	55	5.7	58	5.9
小作	113	12.8	73	7.6	56	5.7
合計	883	100.0	961	100.0	980	100.0

注) 旧名久井村勢要覧による。

表3. 農地買収状況(昭和25年現在、旧名久井村)

	田	畑	宅地	採草地	計
買収面積	744反	1,428反	4,302坪	43反	4,302坪 2,215反
買収価格	289,741円	222,968円	7,228円	3,547円	523,484円
買収件数	488件	462件	16件	24件	990件

注) 旧名久井村勢要覧による。

葵等の生産資材の販売も扱っている
ので、農民は今までの同族組織を越
えた外部社会と結びつかなければ生
活出来なくなった。

以上のような原因から、同族組織
を越えた部落や村が自覚され、認識
されるようになり同族組織は次第に
潜在的な統一体に変化したと考える。

しかし潜在的な統一体に変化したと
いっても、まだ同族組織を無視して
部落を語る事が出来るまでになっ
ていない。このように同族組織が根強
い理由は何なのであろうか。部落の中
は、長い年月に渡って直接的に顔と
顔をつき合わせ熟知し合った固定的、
静止的人間が狭い社会的空間の中で
生活している。従って考え方や、生
活様式まで似通ってくる。このよう
な人々が祖先代々の土地を耕作する
部落は、土地を媒体とした永続性、